

製品安全・環境委員会 上野委員長インタビュー

Q1：製品安全・環境委員会の意味と目的についてお話し下さい。

AMEIのホームページに「協会の主な活動内容」のページがあります。最初に出てくるのがMIDIに関する活動で、まさにTOPに相応しいと思います。その次に知的財産権に関する活動が来て、製品の安全や環境保護に関することは一番後なんです。かつては、環境問題はともかく、製品の安全規格は我々事業者にとっては相当プライオリティの高いテーマだったので、ちょっと意外な気もしていましたが、AMEIの変遷をみてみると、なるほどという気もしてきました。AMEIの会員企業が、当初は楽器関連事業者中心であったものが、最近ではIT関連企業など、ソフト関連企業の割合が増えてきて、メインの関心事が変わってきたという背景があると思います。もう一つ大きな要素として、委員会の皆さんの地道な努力によって、より安全な、そして品質の高い製品がお客様に提供できるようになってきた、結果としてプライオリティをことさらクローズアップする必要がなくなってきたということの現われではないかと思っています。PL関連で電子楽器が問題を起こしたことはないのではないのでしょうか。

ただ、商品の安全性に関する要求は益々増大していますし、国内の家電リサイクル法や環境保護に関する欧州指令など、取り組むべき課題が次々として出てきておりまして、これらの課題をクリアして行くには、事業者個々の努力とともに、業界全体で取り組むことが大切で、そのような意味でも製品安全・環境委員会の役割は今まで以上に重要になってくるのではないのでしょうか。

Q2：当面の重点テーマとしてどのようなものが挙げられますか。

中国、台湾、韓国の安全規格やEMC規格（電子機器の妨害電波に関する規制）の動向には当面注意する必要があると思います。CSA（カナダ）やUL（米国）に比べてスムーズに規格認定が取れず、各社苦勞されていると聞いています。特に中国は情報が少なく、日々その申請手続き内容が変わったりして対応に苦勞しておられる企業も多いと思います。安全規格部会では出来る限りの情報収集や情報交換を通じて、会員各社がスムーズに処理できるようお手伝いしたいと思っています。

最近の製品は、AV機器とIT機器（コンピューターおよびその周辺機器）の境が曖昧になってきています。通常楽器はAV機器のほうに入るのですが、規格の流れは、安全もEMCも今後はAV機器とIT機器の規格を合体、整合させようという方向で動いています。AMEIとしても、楽器業界に不利な基準にされないよう動向を見ていく必要があると思っています。

環境問題研究部会の当面のテーマは、RoHS（ロース）指令といわれる欧州指令でしょう。2006年7月1日以降、鉛やカドミウムなど6つの指定有害物質を使った商品は欧州では販売できないというもので、例えばプリント基板の半田付けに従来の鉛半田が使えないというものです。あと2年後に迫ってきているのですが、禁止物質の許容値がなかなか決まらない問題とか、そのため検査手法も定まらないところがあるので、当面注意が必要です。部会のメンバーの協力により、情報を逸早く手に入れて会員各社でスムーズな移行ができるようにしたいと思います。

Q3：委員会活動を進めるに当たっての問題点などはありますか。

安全規格の遵守や環境に配慮した製品設計という、製品のスペックなんかと比べると、どうしても地道な取り組みですから、各委員の方々が本来の業務のかたわら委員会活動を続けるのに、常日頃から会社の業務と委員会活動に挟まれて苦勞なさっているのではないかと思います。商品の安全性確保や環境にやさしい商品の提供

というのは、我々企業が負うべき社会的責任です。安全でない製品はリコールにもつながるわけで、コンプライアンスの重視、リスク管理という点から、現在、日本の企業に突きつけられている非常に重い課題を各委員の方たちは担っています。このような観点からも、会社の上層部の方々には、安全と環境に関して手を抜くとひどい目にあいますよということを取上げて申し上げたいと思います。

今回、当委員会の事業説明会を企画したのは、このような狙いもありました。（7月6日開催／次頁参照）



製品安全・環境委員会 上野博司委員長

Q4：委員会の将来像についてお話し下さい。

当委員会は昨年までハードウェア委員会と称していましたが、活動内容をより具体的に表わす名称にしようということで、本年より製品安全・環境委員会と改めました。社会的要請やテクノロジーの変遷により活動内容が徐々に変化し、名称とのギャップがいつのまにか大きくなり、結果として名称変更を余儀なくされたということも言えると思います。このような変遷は今後も続いて行くと思います。先ほども申しましたように電子楽器は安全規格上AV機器に含まれるのですが、ベースとしている要素技術そのものがIT機器と差がなくなってきて、規格のほうも一本化しようという動きもあります。IT機器というのはソフトウェアの占める割合が非常に多いことから、相当な部分がソフトウェアとオーバーラップしたり、置き換わりつつあることは、皆さんご承知の通りです。このような変化は益々加速されていくと思います。しかしハードウェアとしての楽器が無くなることは決してないというのも皆さんも同意していただけたと思います。電子楽器が電気を使う工業製品である以上、また、数多くの部品や材料を使う以上、安全や環境負荷に対する配慮は今後もおろそかにするわけにはいきません。特に環境問題は益々深刻になり、コストも上昇することでしょう。

最近では環境に関するコストを多くかけている企業は良い企業だ、みたいな誤解もあるようですが、民間企業の本来の在り方からすれば逆で、如何にコストをかけずに環境に優しい製品を作っていくかが、我々の今後のテーマだと思います。委員会は、そういった実質的な課題について意見交換ができる場を積極的に提供していきたいと思っています。

Q5：委員長としての今後の抱負をお聞かせ頂けますか。

今の繰り返しになりますが、製品コストの上昇を最小に抑えつつ、安全でかつ環境に優しい製品をお客様にお届けするには、という非常に当たり前ではありますが、大変困難な課題に今後我々は取組んで行かねばならないわけで、当協会の活動を通じて各会員企業の皆様に何らかの形でメリットを感じていただければと思っています。

また、ボランティア的に時間や労を惜しまず提供してくださっている委員の方々に何らかの形で報いられるようなことを考えたいですね。表彰制度もその一つかと思いますが・・・。
～お忙しいところ、どうもありがとうございました。～

製品安全・環境委員会 事業説明会・セミナー開催 ～平成16年7月6日（火）東京弥生会館にて～

7月6日（火）東京弥生会館にて、製品安全・環境委員会の事業説明会とセミナーがAMEI会員会社を対象に開催されました。

この説明会は、同委員会が取り組んでいる製品の安全性や環境問題について、当協会の会員が正しく認識し、更に一層具体的な業務で活用すべく、同委員会の位置づけや今後の方向性等を会員会社に広く理解、確認してもらう目的で開催されたもので、電気・電子楽器や音楽事業関連ハードウェアを製造、輸入、販売している会員会社を中心に30余名が参加しました。

第1部の事業説明会では、上野委員長(前頁参照)から委員会の趣旨と目的について、安全規格部会および環境問題研究部会の各部長から各部会の業務方針についてそれぞれ説明がなされ、同委員会活動の重要性を出席者全員で共有することが出来ました。

第2部の専門部会セミナーでは、外部からお招きした講師お二人により、アジア各国における電気・電子機器の安全規格の実態、および地球環境を保護するグリーン調達について、それぞれ専門的な立場からの貴重な情報を頂戴することが出来ました。



第1部 事業説明会

A：「本委員会の趣旨と目的」

製品安全・環境委員会
上野博司委員長

製品に対する安全性や環境保護への社会的要求が日増しに強くなっている実情を踏まえ、委員会名をハードウェア委員会から現在のものに変更して対応に当たることになった経緯などを説明。



B：「安全規格部会の業務方針」

安全規格部会 末次賢一 部会長

安全な商品の供給は経営の基本であり企業の社会的責任であることや、法規・基準・認証が増大しつつも改廃が頻発している中でこの部会の重要性は多大であることなどを説明。



C：「環境問題研究部会の業務方針」

環境問題研究部会 八木茂良 部会長

国内および海外の環境に関する法規制の動向や情報を調査することがこの部会の中心的活動であり、今年度は有害化学物質を中心テーマにして活動を進める方針であることを説明。



第2部 専門部会セミナー

A：安全規格「台湾、韓国、中国、シンガポールの安全規制の解説」

(株)ユーエルエーパックス マーケットアクセスサービス部
マネージャー 奥野克幸氏

台湾のRPC規制、韓国のeKマークおよびMICマーク、中国のCCC規制、シンガポールのPSBマークの4項目について詳細な解説がなされ、実務的な具体例も交えた貴重な情報をご提供頂いた。



B：環境問題「グリーン調達調査の共通化について」

(社)電子情報技術産業協会 (JEITA) 環境・安全部
部付グループ長 田中浩幸氏

JEITAおよびJGPSSI (グリーン調達調査共通化協議会) の概要や、グリーン調達 (環境に優しい部品や材料を優先的に調達) の重要性についての説明がなされ、内外の動向やグリーン調達調査の必要性などについて詳細な情報をご提供頂いた。



セミナーの後、講師を囲んで出席者との情報交換の場が用意されました。セミナーで言い尽くせなかったこと、聴き尽くせなかったことなど、閉会刻限ぎりぎりまで熱心な情報交換がなされました。

ハードメーカーにとって、製品の安全性と環境問題は今後ますます注目されてゆくテーマであり、企業としての評価を左右しかねない重要課題ですので、出席者全員がここで得た情報やノウハウを自社に持ち帰り、各社の状況と適宜整合性をとりつつ、世界に通用する企業としてのステータスを確立するよう願うものです。